鈴木東民（すずきとうみん）　評論家。明治二十八年八月二十五日岩手県釜石生れ、昭和五十四年十二月十四日歿（一八九五―一九七九）。筆名湯田九一。第一高等学校を経て、大正十二年東京帝国大学経済学部卒。大阪朝日新聞社記者、次（つい）で十五年日本電報通信社特派員としてドイツに渡り、ベルリンに八年間滞在。昭和十年讀賣新聞社に転じ、外報部長、論説委員、編輯局長を歴任。この間（かん）反ナチの論陣を張り、著書『ナチスの国を見る』（昭和九年刊）がのちに駐日ドイツ大使に睨まれ、終戦まで休職処分。戦後直ちに復帰し、正力松太郎等社長幹部の戦争責任を追及するなど、所謂讀賣争議を闘争委員長として指導。その後自由懇話会理事長、民主主義擁護同盟常任委員を務め、二十年釜石市長に当選、四十二年まで二期在職して公害行政等に成果を挙げた。

著書に、マイルス・ヴォーン著『日本に迫る影―満洲事変より二・二六まで』（昭和十二年六月十五日時局評論社「外人の観たる日本」）、リリー・アベック著『世界征服を目ざすもの』（昭和十二年七月五日時局評論社）、ヘッセル・ティルトマン著『極東は近づく』（昭和十二年八月二十一日時局評論社「外人の観たる日本」）等の他、著書に『闘うヒューマニスト―近代日本の革命的人間像』（合著・學生書房編集部編、昭和二十二年四月二十五日學生書房）、『現代ジャーナリズム論―その分析と批判』（合著・關西學院新聞部編、昭和二十三年八月十五日大阪・駸々堂）等。鎌田慧著『反骨―鈴木東民の生涯』（本成元年六月二十七日講談社）がある。